家庭の同行（どうぎょう）20
～ひき出されてゆく生きる力～

くだかけ会代表
和田重良

○穴のあきそうな心を、充たしてくれる「もの」
○つないだ手は離さないと、信じている「こと」
○あそこに帰れば迎えてくれると、「あんしんできる」こと

人生の目的と行き先

今回は「シッカリしろ」シリーズの最終回です。一年間おつき合いいただきありがとうございました。

結局、「お金」にしろ、「性」にしろ、「遊び」にしろ人生のしあわせに直結のことですから大切なことなのですが、その大切さは一歩間違えば大不幸になってしまう元ばかりです。だから「シッカリしないと……」地獄のようなガツガツした世界から抜けられなくなってしまいます。

何のために

さて、今年度も最終回は親（大人）の人生観のお話でしめくくります。

大人になって親になったからには本当の『おとなになる』というテーマに一度はシッカリと向き合ってみなければなりません。

社会的役割をこなしているだけではどうしても人生がシックリしてこないと思っている人が多いのだと思います。（……そう疑いもなく暮らしている人も多いのでしょうが）それは「何のために」という基本的な問いかけをキチンと考えることをしないで忙しく生きて来たということでしょう。

学問でも芸術でも医療でも教育でも宗教でも経済、産業、スポーツなどのほか政治でさえも「目的」を問わなかったら何をしても当たりハズレのあるフワフワとしたものになってしまいます。

中でも「教育」はすべての基本になっているのですから「その目的は何か？」といつも立ち戻ってみる必要があるのです。

お母さんが人生の目的を考えてもみなかったら、世の中のできごとはすべて「他人事（ひとごと）」でしかありません。まあせいぜい「楽しかったらそれでいいや」くらいで終ってしまい、「楽しさの本質」や「なんで楽しい必要があるのだろう」という事は求めないで終ってしまいます。

先日、小学低学年の子に「おまえ、こんなことじゃあ将来お金をかせいで生きて行けないよ」と言ってオドシてる親がいました。それを聴いて「ナルホドなあ、このお母さんとお父さんの人生の目的は『お金をかせいで生活していくこと』か」と感心していました。

……それって目的じゃあなくって手段じゃないの……と思うのです。

人間の行く先

作り手と食べる人との腕くらべ

「技術向上」ほめことばこそ　（茂吉）

こんなことを思いました。料理のことなのですが、料理に限らず作り手と食べる人のような関係がいろいろな場面であるのです。お互いにお互いの存在が励みになって、お互いが相手のことを思って、育てるつもりで対していたらきっと自分も相手も成長していけるのです。

親が作り手で子どもが食べる人というわけではありません。親も子もどちらの立場にもなれるのです。誰と誰とでも作り手と食べる人になれます。

でも、そこで問題になるのは「人間の行く先」です。お互いに一所懸命生きてみても「行き先不明」だったらつらいですね。

「シッカリ生きて行き先不明」だと「シッカリ」の意味がありませんから。

「死んだらどこへ行くんだろう」ということを皆一度は考えたことがあるでしょう。でも誰も死んだことがないので誰も知らないのです。

ただ一つ、死ぬために生きてるワケじゃあないってことはよく知っているのです。

「ナゼ生きていくんだろう」「自分で何だろう」「人間て何なのだろう」とグルグルめぐって行きますが、そのことを一度キチンと坐り直して求めてみることは子どもに「人生」を伝えるためにとても大切なことなのです。

誰の人生か？

極端に甘えた人たちは、たいていは「ママがやってくれなきゃできない」なんてことを大きくなっても言っているのです。

何でもかんでも親が手出しして来た結果に過ぎないのですが、大きくなって「ママがいっしょにやってくれ」と言われて……やってあげなきゃこの子は何もやらないで終ってしまう……と思ってまた手出しする。

誰の人生をやっているんだろう？この親子は？？？と思うのですが、結局、「人生の目的」や「行き先」をキチンと坐り直して考えたことのない親の問題だったのです。

子どもをシッカリ育てることはやっぱり「自分」をシッカリ見直すことです。また話がそこへ行ってしまいました。

さて、来年度はいよいよ第三弾の「かわいいについて」をテーマにします。（親と子のかかわり方提言テキストは会員の人の手作りのテキストです。５００円でお頒けしています）

和田重正言葉抄

おめでとう

三月四月はおめでたい月だ。寒さはとり、日は長くなって花が咲き鶯い、何がなくても、おめでとう、と言いたくなる楽しい時季だが、多くの子どもや若者たちには入園入学進級進学卒業就職など心躍ることが重なって来るわけだ。ご当人ばかりでなく親、同級、全家族にとってもこの頃、おめでたいブームだ。

この、おめでとう、とは何を表わそうとして言われるのだろう、と考えてみると――過去にはいろいろなことがあったが、良きも悪しきもすべてを無事乗り越えて今ごこまで来られたのは、「ご苦労さんでした。よかったですねえ」という気持ちの表現なのではないかしら。それと同時に、ここを出発点として、これから大いに努力を重ねて一層深い喜びに満ちた月日を迎えて下さいよ、という願いもこめられているのだ、という気がする。

結婚や就職のおめでとう、は当面現在への到着を祝うより、これからの王道努力への新たな出発に期待する意味に重点が置かれているのではなかろうか。

ご当人たちには是非そう思ってもらいたいものだ。

（昭和四年くだかけ二十九号より）

一口メモ

親の人生観こそ
子どもの教育の
基本です。
いいかげんには
できません。